

いの流水俳壇

松尾 満津於選

「当季雑詠」

春愁や効能書きの字の細き

間 浩太

〔評〕一見して何ということもない作品のように見えて、含蓄のある句である。どこにも薬という文字はないが、句の構成からして薬の効能書きであろう。何となく物憂くて気が塞ぐのが春愁の時季と考えると、細い字の「効能書き」は読む気がしなかったのではなからうか、また期待した程に効き目もないが、それと違って氣遣うような大袈裟なこともなく「春愁」の季語が、いい塩梅に状況の説明をしてみせた句である。

砂踏めば骨の音する夏渚

大西 昇月

〔評〕終戦の翌日、昭和二十年八月十六日、高知県夜須町住吉の浜で、突然掃海艇が爆発し震洋隊員百十一名が悲惨な散華をした。「どうして?何故?」という謎が残されたまま今日に至っている。「砂を踏む」と骨の音がするとは、果たして

どんな音だろうか?…恐らく耳で聴く音ではなくて、心にひびく心音であろう。太平洋戦争で夫をなくした歌人の短歌がある。「この汀夫のねむれる海の果て還らぬ息吹き求め手に触る」と…もうすぐ八月十六日が来る、今年は終戦の年を数えて還暦に当たると。

戻り来し燕の記憶深庇

片岡 包女

〔評〕毎家で子育てをする燕が、果たして昨年この家で育つたものかどうかは、定かではないが、おそらくその一統であることには間違いないであろう。燕はその小さい頭の中にナビゲーションが備わっていて、驚くべき帰趨本能を発揮できるのである。土を固めて巣を造る左官屋でもある。

ほととぎす声渡りゆく宮の森

中野 好子

〔評〕ほととぎすは「ほととぎす」と鳴くとい、「本尊かけたか。」「てっぺんかけたか。」と鳴くともいうが、それは聞く人それぞれに「心の持ち方」でいろいろと受け取り方が異なるであろう。宮の森の上を渡る時の鳴く声?…「鶯は玉を転がす如く、時鳥は帛を裂くが如し」と古くからいわれている。この句は鳴く声だけで余分なものが何もないことで成功している。所謂伝統俳句

はあくまでも「花鳥諷詠」が基本であり、基本に忠実であることが大切である。

- | | |
|-------------------|-------|
| ジャズの音に耳遊ばせてらっきよ切る | 川村 博子 |
| 聖五月草笥の位置を少し変え | 岡本とも子 |
| 五月雨や大河に一つ捨て小舟 | 大川 節弥 |
| 麦秋や池に傾きて讃岐富士 | 友草 水月 |
| 百姓が好きで手をかす田植えかな | 渡辺まり子 |
| 昨日今日腰痛誘ふ梅雨の冷え | 小島 良 |
| 手に受けて飲むや深山の岩清水 | 森元二美子 |
| 気張っても耳遠くなり時鳥 | 川村千因子 |
| 水無月の針箱にある版画刀 | 井上 郁子 |
| 八十路なるお洒落心や花あやめ | 吉良 芙美 |
| 農休日句会に向かう夏帽子 | 竹崎 光子 |
| 秘め事は螢袋の中にな | 津田 久美 |
| 産土の神にあやされ昼寝の児 | 川上こよね |
| でで虫の滑る硝子戸あらふ雨 | 中屋 桜子 |
| 柿若葉一と口寿司に娘の匂い | 弘瀬うき子 |
| キャンデーを食べたし今日の走り梅雨 | 楠目 哲郎 |
| 紫陽花の綺麗どころを花器に入れ | 筒井 眉躬 |
| 短夜の覚めて眠れず窓白む | 川村 愛 |
| 夜更けて河鹿のなく音もうらさみし | 筒井 文 |
| さあやるぞ新な気持更衣 | 森岡 照月 |
| 味噌汁のぬるき朝餉や夏に病む | 榊原喜美子 |
| 都会に籍移し住む子よ梅雨の雷 | 松尾満津於 |

次 題 「当季雑詠」五句
締め切り 毎月15日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133

第34回吾北地区 ふるさとまつり 花火大会

日時

8月12日(土) 18時~21時

雨天の場合

8月13日(日)

以降順延なし

場所

小川小学校グラウンド

内容

吾北清流太鼓

鳴子踊り

花火大会

各種イベント

※いずれのゲームも景品があります。

出店

その他

混雑が予想されます。

乗り合わせ等でご来場ください。

問い合わせ

吾北地区ふるさとまつり

花火大会実行委員会事務局

吾北総合支所

☎ 867-2314

地域振興課